

「<sup>まる</sup>國<sup>まる</sup>國<sup>珍</sup>聞<sup>聞</sup>」

興 津 要

くわしくは「<sup>おどけえ</sup>於東京繪<sup>まる</sup>國<sup>珍</sup>聞」といい、広島県人野村文夫主宰の諷刺雜誌。明治十年三月二十四日創刊、廃刊年月は未詳（明治四十年七月千六百五十四号までは確実）。

発行所は、東京神田雉子町三十一番地「<sup>まる</sup>國<sup>珍</sup>聞社」。明治三十年？から（途中雜誌欠本のため未詳）銀座四丁目四番地「<sup>珍</sup>聞館」。同社は三十六年に京橋三十間堀三丁目十七番地に移転。

編集関係者は、一・二号が編集長河野節造、印刷長小室誠一、三号から二十三号まで編集長横田房吉、印刷長小室誠一、二十四号から三十号まで編集長田島象二、印刷長小室誠一、三十一号から七十六号まで編集長田島象二、印刷長岩崎好正、七十七号から百八十二号まで編集長兼印刷長岩崎好正、百八十三号から百九十一号まで編集長兼印刷長福見尚賢、百九十二号から百九十八号まで岩本誠之助、百九十九号から二百二十八号まで編集長兼印刷長望月長谷雄、二百二十八号から二百三十四号まで仮編集長兼印刷長亀井章三、二百三十五号から二百五十五号まで編集長兼印刷長清水梁山、二百五十六号から三百三十六号まで編集長兼印刷長米内正躬、三百三十七号から三百七十一号まで編集人米内正躬、持

主兼印刷人伴資健、三百七十二号から三百九十二号まで編集人米内正躬、持主兼印刷人野村米太郎、三百九十三号から四百十八号まで編集人吉川善之進、仮持主兼印刷人岡初平、四百十九号から四百四十六号まで編集人米内正躬、持主兼印刷人岡初平、四百四十七号から四百七十六号まで編集人横地磯五郎、持主兼印刷人岡初平、四百七十七号から四百八十号まで編集人光野嘉十郎、持主兼印刷人岡初平、四百八十一号から四百八十五号まで編集人岡田玄寿、持主兼印刷人岡初平、四百八十六号から五百六十号まで編集人武田又六郎、持主兼印刷人岡初平、五百六十一号から七百二十九号まで編集人津田甚三郎、発行兼印刷人岡初平、七百三十号から七百四十二号まで編集人花田正吉、発行兼印刷人岡初平、七百四十三号から八百一号まで編集人手島宇造、発行兼印刷人岡初平、八百二号から八百四十二号まで編集人津田甚三郎、発行兼印刷人岡初平、八百四十三号から九百五十四号まで編集人松村徳吉、発行人兼印刷人岡初平、九百五十五号から九百九十三号？（九百四号未見）まで編集人杉山武平、発行兼印刷人岡初平、九百九十五号？から九百九十九号まで編集人野沢虎三郎、発行兼印刷人岡

初平、千号から千十三号？（十四—十七号未見）まで編集者松村徳吉、印刷者野沢虎三郎、千十八号？から千九十五号？（九十六—百十四号未見）まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者野沢虎三郎、千百十五号？から千百九十号まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者山本策平、千百九十一号発行兼編集者松村貞雄、印刷者駒木塔三、千百九十二号から千三百六十七号？（六十八—七十四号未見）まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者大久保大三郎、千三百七十五号？から千四百六十八号まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者土屋直、千四百六十九号から千五百六十四号まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者西山一二三、千五百六十五号から千五百八十九号まで発行兼印刷者松村貞雄、印刷者林茂、千五百九十号から千六百号まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者富家政之助、千六百一号から千六百四十一号まで発行兼編集者松村貞雄、印刷者牛尾鶴作、千六百四十二号から千六百四十八号まで編集人酒井泰醇、印刷人伊藤豹作、千六百四十九号から千六百五十四号？（以下未見）まで編集人林文三郎、印刷人伊藤豹作。

大きさは、タテ約二十四センチ、ヨコ約十七センチ。

はじめ毎土曜発行。十五年七月から第二、第四月曜もくわわり十六年五月から毎水、土曜。十七年七月から毎土曜発行となる。

定価五銭。十八年七月から六銭。二十六年三月から五銭。

はじめ十四・五ページ。ワクつき二段ぐみ、さし画いり。二十二年二月から約二十ページ。色ずり表紙。三十三年から美人写真が表紙。三十六年六月から三十二ページとなった。

同誌の発行された明治十年三月という時期には、いわゆる明治

式戯作が興隆にむかいつつあった。

すなわち、明治五年の「三条の教憲」発令以来、ほとんど沈黙状態にあった戯作が、小新聞の八つづき物Vの成長からしだいに息をふきかえし、単行本に、雑誌にと、その発表の場をもとめつつあったのだった。

十年十二月から十一年一月にかけて「仮名読新聞」に連載された「鳥追お松の伝」が十一年一月に、「鳥追阿松海上新話」と題して刊行され、「団団珍聞」以外にも十年十一月に「魯文珍報」が十一年七月に「芳譚雑誌」が創刊されたという事実がよくこの事情をものがたっている。

同誌の性格は、つぎの文章がよくえがきだしているので、少々ながいが引用しておこう。

演舌

東西々々江戸の故風は倅置て今新らしき於東京絵を入れて摺り出す新聞は彼の西洋のボンチてふ洒落た模やうに見真似せしものにはあらで我くにに滑稽つくす戯言はかづ／＼あれど公やけに梓に上すことはまづ忌み憚りてむつかゆき背中へとどかぬ手の如とく自由にならぬは昔しの事今文明の恩沢に官許を受けてあからさま打ち明て書く新玉の玉の光りは自づから闇の野蜜の肝玉を磨く為にと手短かに表ては早くお理會の川柳気取内証に味を附けたる手前味噌塩ほの辛いをお見捨てなく睡気を醒し鬱悵を除くばかりの功能とお笑ひくさに勸懲の二つは格別ね折らず利益の有無は先様次だい記者は戯ふれて筆を執り（実は一生懸命）看官衆のおしかりを百も承

知の上を見ぬ鷺鷥の爪のさきなんでもかでも引かけて只おかしきを旨意なれば皆様その気で毎号の発兌をいそいで御評判々々々

イヨ口上——

という文章につづいて、「社説」欄にはつぎのようにある。

団々の説

世の中の万の物は皆○き地球と天球の下に成立事ぞかし月日も○く星○く抑人の成り余る所も○く成足ぬ所も○く○の墨丸と乳房を人種の始めとなして神国の神の御前にかかけましくもかしこき徳の十寸鏡備書の大極禪宗のさとし言葉の円相も○きを以て体とす鉄砲玉に鏡太鼓鳴りわたりたる俳優は団十郎が親玉で開化な軍談伯円に昔嘶は円朝を当世流行は○顔のボチャ／＼とした○容ち子僧の得意は印度豆阿三の好な焼芋は○い自慢の十三里をこらはおいて第一に皇国の旗の赤玉は明治の御代の目出度さを高く顯はす日の○の其恩沢を一日も忘れぬ為に○を名号にしたる○なれば嫌疑を避る○ならず我○の一号は世間へ新に顔出しの卵なれどもおひ／＼に声を出して羽を舒べ彼の大鵬の九万里は只探訪の足まかせ聞く事見る事そっくりと○で残さぬ筆始め眼を○くして○の由縁を穿鑿りて○の説を自ら祝詞に代ふ

以上、まことにとほけた文章だが、これがさし画の漫画とともに「団珍」ムードをかしだしていたのだった。

最初期の内容は、社説、(十二号から茶説と改題) 雑報、和英対訳、雑録、寄書などの各欄からなっている。

たとえば第七号(十年五月五日)をとりあげてみると、「社説」はつぎのようになってゐる。

婦人論

四千程世ニ不幸ナル者ハアラジ百年ノ苦楽他人ニ任カスト云テ何ヲ為ルニモ彼ヲ為ルニモ一了簡ニテナスベカラズ鍋ノ毀レタモ箸ノ折レタモ皆宿六ニ決テ取ル一文銭ヲ遣フニモオモテ晴レテハナラヌナリ況ヤ沉酒淫蕩ヲヤ適ニ芝居ヲ見テ帰リ俳優ノ品評ヲスルニサヘ傍リヲ憚リ他ヲ畏レ白昼ノ鼠ニ異ナラズガツタリシテモ胸ニ針コソソリシテモ脛ニ斑耳ヲ側テ目ヲ張テ苦辛縮氣ニ世ヲ送ル素ハ如何ニト尋ヌルニ支那ノ儒教ヤ印度ノ仏道ナドヨリ始レリ先ツ支那人ノ言ニハ幼ナクシテハ親ニ從ヒ嫁イリシテハ夫ニ從ヒ老ヨリテハ子ニ從フ其三從ノ法ヲ立テ一生頭ヲ上ケサセズ印度教ノ言草ニ女子ハ生レテ許多ノ罪障宿業多クアル故ニ鬼ニ成リタリ蛇ニ成リタリ成仏得度ハ覺東ナシ其婦人ヲバ娶ル人子ト云フ瘤ヲ又担キ妻子ノ細ニ身ヲ束縛ラレ振廻ハシテモ振りキレズ共ニ深水ミ沈ムナド厄介者ノ最上トクサシタ事ガ從來ノ定規トナリテ婦人ヲバ只洞房ノ夢ヲナシ雲雨ヲ娛ム玩弄物トシヘイ今日家長ハ在宿カ不在ナラ又明日ニモト内政ハ在レトモ無キガ如クナリ女房モ夫ヲ常トシテ長イ煙管ヲ突ツ張ラシ子僧ヲ叱リ下婢ヲ責メ親ムモノハ女髪結ト猫ト裁縫婆ノ三家ナリ又唐茄子ト琉球芋ト二ツヲ合セテ五家トス又唐繻子ノ丸帶ト浜縮緬ト犢鼻褌ヲ最第一ノ所有物動産中ノ要具トス甚タスキニ至リテハ只細腰ヲ宝トシ化粧スルヲ功績トス何ソ心術ノ鄙劣ギゾ抑人ハ万物

ノ靈ト称ヘル尊トサハ男女ヲ合セテ云フナレバ婦人ノ品行心操スノ如クニ為リ下ル下々ノ氣像ヲ一洗シ我國風ト西洋ノ風俗トヲバ監ミヨ其往古ハ婦人テモ天子ノ位ニ即キ玉フ神代ヲ借テ人皇ノ神功推古持統元明英國ノ「マリー」「イリザベス」魯亞西班牙ノ女王ヲハジメトシ清少納言赤染衛門泉式部小式部ヤ世々ノ貞操節義ヲハ吾身ニ当テ怠ラス學問諸芸ヲ勉強シ男女同等同權ノ真理ヲ得ルハ宜ケレドモ牝鷄晨ノ空鳴ニ一家ヲ亂シ破産シテ夫ヲ奴僕ニヒシ遣ヒ仏頂面ヲ振り回シ嫌旦那ト称ヘラレ朝寐ヲナシテ昼寐シテ宵カラボク／＼居眠ノ果テハ饒舌敖放ノ山ノ神ナド尊号ヲ受ケザル様ニナレヨカシ

というように、かなりまともに、啓蒙的な調子でとかれてゐる。「雜報」欄のほうをみよう。

○元將某隊の人で駒込に住む將某好の書生さんが深川の娼妓に深くはまり込みあまりさしこみ過たので玉將高が積つて金の才角に尽き人力車を頼んで將某の朋友の処へこんな手紙を送られましたと飛車をもつて借用銀將差出し候昨夜よりの姦情貴殿より一寸仮宅候金度の失策我ながら歩角の至り実に玉將致し候間困甚は必ず可相愼と漸く將某に相成申候香桂とか、あるいは、

○肥後は神風だの薩摩は封建だのとナゼあんなに開化に進まないだらう夫だからあの国々を旧習といふはとザンギリの書生さんが

などとかかなりとぼけた文章がならんでいる。

「雜錄」欄にはつぎのような川柳や文章がみえる。

西郷の疝氣兵士の頭痛なり  
熊公は多らい喧嘩を持こまれ

暖昧の手で打悪い薩摩けん

○文明世界大演戲一場話  
開化 亞米利加總生覽

大智は愚の如く大巧は拙の如し早く華き乍ち実る草木は枯落も亦速なりされば亞米利加發見の闢電てふ其人は伊太利國のゼノワなる貧き人の子なれども地理の學に厚くして凡そ地球の其内にある國々を見出して文明開化の其本の財を集め富をなし民に幸ひすべき為め心を碎き身を粉にし乞食とまでなり果て西班牙國の女王より船三艘を借受て大西洋へ一文字乗出したる鉄の船より堅き一心は岩をも通す闢電「イカニ方々いふ迄も無き事ながら鳥も通はぬ大洋の山より高き浪風を凌でこゆる幾千里命をすてゝ漕出し二百余名の諸人に却て我に勝りたる志こそ感じ入る我は数年の學びにて必ず國のある事は已に考ひ附し上マデーラ島に流れよる人の死骸の異体なる今知る國の人ならず（以下略）  
などとなる。

○「寄書」欄は

○役払 牟田口加多留

アア五月蠅な／＼一つよければまたわるひ一夜明れば新玉の玉の大きき二分五厘三ツ四ツ五ツ六ツかしの戸さゝぬ御代に戸をめて身代限りや売家や札を並べて春もまだ十一日の御藏まへひらく間もなく大地震そりや大變とにげ出すとたんにゴロ／＼ピカ／＼と俄になり出す電信何ぞときけば西國で其

名も高きは親仁三位西郷隆盛が雲井に近き身もちて雷大鼓を叩きたてあられ交りの鉄砲玉（以下略）

以上のように幼稚な内容だが、当時においては珍重されたい。すなわち、

○本社珍聞第一号増刷の御披露

今般本社に発兌仕候第一号五千部摺立て此内三千部を日報社へ依頼該府下の御得意先へ抜き／＼配達仕り残る二千部を以て本社より諸方へ売捌き仕候所望外に江湖の愛顧を蒙り御文を以て御註文は雨の如く御催促は矢の如くなれども最早売切りに相成候故更に増刷御笑覧に相備へ候間尚又御所望の御方は御求め奉冀望候（二号）

本社珍聞増摺に付広告

本社珍聞第一号第二号合して一万二千部摺立候処売捌方日々相増し冊数不足に付又々此度三千部増摺仕候間売捌所の内御不足の御方は御申越し被下度奉希候（三号）

このような好評のうちにあった同誌は、さらに戯作復興の機運に呼応すべく、三十四号（十年十一月十日）から戯作の連載をはじめにいたった。

その作品は、梅亭金鷺の「文殊痴患 三人同行」で、団々社の余探訪

文六、明七、開八、化三の四人が、「七偏人」さながらのドタバタ喜劇を演ずる滑稽小説だった。それが五十二号（十一年三月十六日）になると、この小説欄は八付録Ⅴと銘うって独立し、「文殊痴患 三人同行」は「探訪膝栗毛」と改題され、おなじく金鷺の人情本風な作品「春色花暦」も連載されはじめた。

このように戯作的要素をくわえていったのだが、もともと八付録Ⅴ欄は中途半端な存在だった。

八十号（十一年九月二十八日）の同誌にはつぎのような文章があって、八付録Ⅴが独立して戯作雑誌「驢尾団子」が創刊されることを予告している。

……東西々々チヨイト広告頃は去ぬる弥生の末五十二号を摺出すとき本紙に添へたる付録の趣向は鴨の脛の短きを補ひ三日月の欠けたるを繕ひ奇事の完全珍談の団円を要し書ものに種惜の譏りなく読人に物足すの恨み無く記者は十分の力を尽し看客も亦十分の楽を得二つ合せて二十分には足らぬものから十四号滞りなく四方八方の愛顧を受しは弊社の面目宜い氣になりて此に又工風搗ぎ出す驢尾団語付録に代るに眠り覚し……（以下略）

という文章のとおり、十一年十月九日から十六年五月九日（二百三十四号）まで、「驢尾団子」が刊行されたのだった。ここにいたって、「団珍」はふたたび戯作をオミットした諷刺誌としての特色だけをみせるにいたった。

ここで、同誌の特色ともいべき諷刺的傾向をみておこう。たとえば、四十八号（十一年二月十六日）の「雑録」欄につき

○かな説新聞は年中猫を追捲つて折々爪で引抓れるが○珍めは二度斗りも呼出されながらこりもなく髯のあらを脇櫛から引出してイヤハヤ鼻持のならぬ臭味を嗅せるに能く閑下は御立腹なされませぬ子とお弁茶羅書生が聞たれば其御方様はッ

ンと済して筆を採り

官員のなる堪忍は誰もするならぬ堪忍するが官員だと示されまじが弊社に取ては誠に御官員様は官仁大度実に御賢明様と申し奉まつりまして難有いと存じ奉まつりますコレ化三も来て御礼申しな「唯々是はハヤみぎし」左の御旦那さま——方お慈悲やお情で助かります

このように、とりわけ諷刺の筆は官員、政府を対象にしたものがおおい。

三十三号の「当世内心鏡」という番付では、「大関 紙幣終の始末はどう仕様と思ふ〇〇」「関脇 新聞を廃したいが各国有故思〇〇」「小結 等が下りても官途が宜と思ふ官吏」「前頭 官員になる積りで学ぶ書生」などとなつており、四十四号の「当世贅競」という番付では、「大関 我儘勝手な政府」「関脇 玩弄院」「小結 愚内証」「前頭 忤むしの兵隊」「同 月給鳥の髻」「同 不品行の巡査」などあり、おおいに政府を刺戟したのであることが想像されるが、つぎの「茶説」(八十六号)のごとくにいたつては、政府に危険視されたのも当然だった。

### 〇謀反人ハ国ノ英華

……(前略)謀反ナルモノ、国家ニ禍スルガ如モ真実本統ノ所ハ然ラズ光秀叛逆シテ信長毘田張リ安祿山起テ唐帝通ゲヂヤコビノ党発シテ路易素首ヲ失フガ如キ一時悪ヲ流スニ似タリト雖モ雨降テ地固マルノ道理ニテ広ク後世ヨリ活眼デ見渡セバ社会ノ禍災ヲ私ヒ政体ヲ改メ氣風ノ不振ヲ治メ世ニ洪益有事風邪ニ迫出シ宿醉ニ宝丹鬱氣蠱シノ於東京絵モ當ナラ

ズ実ニ最モ本統ニ功能利目アル可ハ謀反ヲ以テ第一トスベキ也其証ヲ吐鳴シカ武王謀反シテ周朝興リ劉邦叛逆シテ漢延四百年ノ基ヲ開キ米利堅英國ニ背テ独立ノ国是ヲ定ム権助謀反ヲ企テ内室ノ御目玉ヲ食フオット此件ハ別途ナリトシテ我が国ニ於テモ古来英雄豪傑ノ事跡ヲ考フルニ大抵謀反者ナラザルナシ近ハ今日廟堂ノ諸賢ハ皆徳川時代ノ謀反者也謀反起リテ旧弊廢シ叛逆事ヲ為テ陋習更マル国ニ叛反人アルハ英氣ノ盛ナル也英氣衰フレハ人民ニ氣力無シ焉ンゾ謀反ヲ企ルノ存ジ寄アラシヤ否ナ然ル思シ召シハ生ゼサル也故ニ曰ク謀反人ハ国ノ英華也ト輒近我國謀反人勃々トシテ西方ニ頭ヲ挙ク余ハ当路諸君ノ為ニハ其心中ヲ五推察申スト雖モ密ニ国ノ氣力ノ為ニハ其衰ヘザルヲ賀セザルヲ得ズ……

これは当然停刊の処置をうけねばならなかった。八十六号(十一年十一月九日)、八十七号(十一月十六日)であったのにたいし、八十八号は十二月二十八日刊となつており、その巻頭には、「茶説」ならぬ「謝説」のタイトルのもとにつぎのようにある。

……恩解ヲ祝シテ賀宴ヲ設ケ社員各々歡酔シテ眠リニ就シニシツヤボ正シキ一老翁枕上ニ現ハレ……(中略)今後復タ平親王將門ヲ教唆シ足利尊氏ヲ煽動シ其他人々ノ目ニ障リ耳ニ障リ氣ニ障リ續ニ障リ諸々ノ障リ事ヲ矢鱈ニ扶クリ出シ其上ニ又手ガ障リ足ガ障リノ一件モ無遠慮ニ書散ス等ノ事アラバ其節ハ必ス汝ガ米飯ノ穀安ヲ妨害スルニ至ルベキナリ返ス々々モ余ガ戒メヲ忘レズ勝手ナナ平ヲ止テ昇平ヲ唱ヘ低頭平心シテ平日平常唯平ト畏マレ(以下略)

という文章が、一おう謝意をしめしている。

以上のように、藩閥政府の方策、役人の非難などをこととした初期（十年から十三年ごろ）が、読んでもおもしろく、同誌の特色のよくみられる時代だった。

この時期のおもな執筆者は、梅亭金鷲（迂流散人とも）、総生寛田島象二（任天、酔多道師）などだった。

以後はしだいに自由民権思想の宣伝啓蒙的色彩をくわえていった。

それはたとえば、

### ○官劔ノ仕込杖

……（前略）此ニ此ノ仕込杖ニ類スルモノアリ何トナレハ新聞記者タルモノハ世人ノ為メニ世路ノ荆棘ヲ抜キ公明正大坦々タル大道ニ導キ以テ他ノ岐路ニ蹈迷ハサラシメントスルノ杖ナリ之ヲ小ニスレハ一國ノ杖ト為リ之ヲ大ニスレハ全國ノ杖トナル然ルニ其杖中或ハ外面ハ杖ノ皮相ヲ為スト雖トモ内心ハ官劔漸進刀ノ鈍刀ヲ仕込ミ以テ自ラ好器械トシ他ノ民劔自由刀ニ太刀打シ有髯社会ノ予棒タラント欲スルモノアルハ果シテ何ノ意ソ嗚呼憫ムヘキハ官劔ノ仕込杖卑ムヘキハ漸進刀ノ仕込杖ナリ何ソカ、ル卑屈ノ心ノ鈍ヲ磨キ杖ヤラ刀ヤラ、曖昧タルステッキノ了簡違ヒヲ翰ニ取メ民劔自由刀ノ光下ニ降参シ以テ国家ノ好器物トナラサルヤト姦ニ亦ステツキノ説ヲ述テ反對論者ノ頂上ニ一本参ラントス尚仕込杖ヲ以テ防カント欲スルヤ否ヤ（二百五十七号）

といったたぐいのもだったが、好評だったらしく、つぎのよ

うに発行回数もふえている。

### ○団々珍聞発兌日増殖驢尾団子体裁改正の前置口上

団十郎に因ある此団珍も御蟲負のやまとはおろか唐天竺欧米諸国の髯さん迄私三ます宜しいの評判枿々高土間棧敷毎月土曜の御目見も国会ならねどお待兼期日を詰ても発刊せよト或る御蟲負の御進めにより弥々此度二回を殖し是迄の外に第二第四の月曜日を加へ本月より都合六度（或は七度の）御目見と定め……（二百七十一号）

十六年五月には姉妹誌「驢尾団子」が廃刊になったので、その役目もかねるべく発行も週二回、内容も茶説（四百十四号から酒蛙説）珍報、狂画、和漢欄、雑録、出放題、粋多楽史（梅亭金鷲の戯作などあり）の各欄となった。同誌に「編集趣意改正笑例」という「茶説」があるので、かかげておこう。

一本社ハ本来無主義無精神ニシテ唯洒落ト地口ノ問屋卸シ並ミタル所自今以後殊更ニ屁茶ノ茶説ノミナラズ一体ノ有様ヲ茶々無着茶ニ改良否談良シテ専ラお笑ヒヲ催シお慰ミヲ謀リ弥以テ滑稽一流ニシテ角ド張ラズ実ニ吾ガ団々ノ名ニ負カザル様致シ候事

一第一政体ノ彼此ヲ道フ可ラズ凡ソ上タル人ハ上タル人丈ケノ徳アリ功アリ名アリ能アリ明カナル御世ノ至テ明カナル御眼鏡ヲ以テ其職ヲ授ケラレタル方々ノ恩召ヨリ出ルコトナレバ其当坐ノ所ニテハ兎モ角モ後々ニ至ル時ハ必ズ吾輩人民ノ為メニ有難イ御仁術ノ照応アルコト疑ヒナシ（中略）長い者ニハ巻カレトノ主意ヲ遵奉致シ候事

このような趣旨のもとでしだいに諷刺的な色彩もよわくなっていった。

二十五年二月には、つぎのような広告によって改良をはかっている。

弊社団々珍聞は去る明治十年三月十二日を以て東京神田雄子町卅二番地に出生し今や二十有五年の星霜を経て名声遠く海の内外に響く一個の快活男児なり滑稽家なり又一種奇妙不可思議なる政治家なり又変挺来なる代議士なり而して或時は壮士の如く或時は粹士の如く神出鬼没世人をして胆を冷し汗を渥らし頤を解かしお臍を転寓せしむる実に天稟と謂ふべし然るに客臘帝國議會も忽ちに解散となり六百の議員も一時口を噤みて再び選挙に奔走するの氣運に成るや珍聞子大いに感ずる所あり不偏不党の主義を以て益々奮勵滑稽党洒落笑府を組織せんとし彼の帝國議會の選挙日に先づ二日即ち来る二月十三日の發刊より紙面を改良し表画を彩色にし口画を入れ木版彫刻画を挿み有名大家の戯文を掲げ紙数増殖し活字も亦鮮明にして新内國否団の組織左の如し

というような文章につづいて、「編集員に渡辺喜望、長井金升、

小林清親、吉川武骨笑軍」、「客員小説特別桜痴居士、山田美妙齋、西森骨皮道人、古田酒仏」などあって、多少活況はみせるが、十年代のはなやかさにはおよばない。

もちろんこういう時期においても同誌の特色である諷刺的傾向がきえたわけではなく、たとえば二十七年三月（九百五十一号）には、「古今早替り見立」という番付けで、東には「内閣諸卿の進退、星前議長の資格」、西には「自由黨議の軟化、次官候補の品定」などある。

以後はますます特色がうすくなったまま、四十年すぎまで刊行されている。

二十年以後のおもな執筆者は、鶯亭金升、山田美妙、福地桜痴などだが、幸徳秋水もいろは庵と称して茶説をかいている。

同誌は日本における諷刺雑誌として、早い時期におけるものとも有力な存在であり、しばしば発行停止の処分をうけながらも庶民のなかに自由民権思想を普及宣伝した功績はおおきい。この点において、同誌はおなじ時期の「芳譚雑誌」「人情雑誌」などのいわゆる戯作雑誌とは一見似かよっていないながら、本質的にはべつ